

ツイてる勇者さま!

狩野景
挿絵／ちり



立ち読み版

酔いの回った脚がよろけてもう身体を支えていられない。

しかも下腹の奥に生じた切ない疼きも治まらず、それどころか強さを増してきている。

「ちよつと、こんな所で寝ちゃったらダメだつてば。魔王を討ち取った勇猛果敢な勇者で

ある前に、あんたは歴とした一人の可愛い女の子なんだからね」

「うふふ、今夜は久しぶりに、一緒のベッドで寝ましようね。子供の頃と同じにね♪」

剣士ミューネと魔導士エピカにへたり込んでしまった身体を優しく支え起こされ、もう抗う態度を取る気力も湧かない。女勇者の肉体に乗り移ってしまった魔王アーヴェンガルドは、茫然自失のまま二人に従って寝所へと連れられていった。

贅を尽くした魔城の部屋とは比べものにならない粗末な一室。

アーヴェンガルドは、女勇者の身体で行儀悪くベッドの上に胡座あぐらをかいていた。

ようやく酔いも覚め、ともに働くようになった頭でこの事態を認識する。

「くそ、何か妙な魔力が働いちまったようだな。しかしよりもよってこんなクソ忌々しい身体に乗り移っちゃまうとは……」

絶体絶命の危機に、体勢を立て直すため苦し紛れに使おうとした移動魔法を、発動しかけた瞬間に中断されたのが原因なのだろうか。今となっては確かめる術もない。

「こうなっちゃまったらもう仕方ねえ。いやむしろ、このクソ勇者の身体乗っ取れたのは、ラッキーだったのかもしれないねえな！」

どのみち元の身体は倒され、元には戻れない。

だが意識はこの肉体に宿り、自由に動かすことが出来る。

「魔族から世界を救った勇者様が、悪逆の限りを尽くして人間共を恐怖のどん底に叩き込む、か……。それはそれで楽しいことになりそうだな」

女の身体というのが気に入らないが、それでも魔族を統べる魔王である自分を打ち倒した正真正銘の勇者。実力は折り紙付きだ。違和感は慣れればどうとでもなる。

仇敵の姿での蛮行に人間共が怯え、驚き、怒る様を想像しただけで、敗北の悔しさがいくらか紛れた。これからの計画に胸が昂る。

「だがその前に、邪魔な連中を始末しちまわねえとな」

勇者と共に魔族へと乗り込み、多勢の魔族をものともせず暴れ回った仲間たち。

暴れ回るときに、一番の障害となるであろうそいつらの息の根を止めなくてはならない。「ふん、まずはこいつからだな」

どうやら着替えをする余裕もなく酔いつぶれてしまったらしい。ただでさえ狭いベッドの隣で鎧姿のままで呑気な寝姿を晒す、桃色の髪を渦卷かせた緊張感の欠片もない女。

しかしこいつは、無敵の剣撃を誇るアーヴェンガルドの巨大な刃を貧弱な片手剣で軽々と跳ね上げ無防備にさせた、恐るべき剣士なのだ。

一刀で魔族を屠る剣技からは想像も付かぬ笑っているような寝顔で、むにやむにやと寝言にもならない声を漏らす。リラックスしきって横たわるぼっちゃりとしたその身体を仰

向けにさせると、魔王は馬乗りとなつてミューネの首筋を絞めようと両手を伸ばした。

だが、見下ろす視界に圧倒的な膨らみが二つ、己の自重に悩ましく拉げ谷間を刻み、胸当てから半ばこぼれ出ている。

「へっ。城で見たときも思ったが、とんでもない乳してやがんな、この女剣士」

魔族には拔群のプロポーションをした妖艶な女がいくらでもいるが、その連中と比べても引けを取らないだろう。しかもこれだけの巨房を誇りながら、顔立ちはまだあどけない少女のような未熟の可愛らしさを保っているタイプはむしろ魔族に余りない。

「どうせだから、辱めを存分に与えてから命を奪つてやるのもいいな。それにこいつが一番心を許す勇者様に恥ずかしい目に遭わせられて、どんなツラするのも見物だ!!」

首を絞めかけた手で、魔王はミューネの豊満な乳房を遠慮無く驚掴んだ。

「ひうっ!」

ふわんとした甘味菓子のような柔らかい感触が指先を出迎え、そのまま力を込めると何の抵抗も感じさせずぶずぶと指を根本まで埋まり込ませた。寝ていても刺激は受けるのか、ピクンと色香漂う身体を打ち震わせ、鼻に掛かった声を上擦らせる。

「へえ、すごい……な、こいつの、乳……。熱い肉が指に絡まって……。結構弾力もあるぞ。物凄く柔らかいのに……!!」

もっと荒々しく扱ってやるはずだったのに、思わず感嘆の声を漏らして極上の触り心地を味わうようにゆっくりと掻き回すように房肉を揉み捏ねる。

「ふ……あ、は、あ、んふあ……」

眠りこけているミューネの眉が切なげに寄り、呼吸が熱帯びて速くなった。

くねくねと上体をくねらせ始め、しかしそれでも起きる兆しは感じられぬ彼女の巨胸を、女勇者の姿をした魔王はますます大胆さを増して捏ね回していた。

「たまんねえ！ 揉めば揉むほどこの乳、いくらでも肉がほぐれてくる。くそ、俺が元の身体のままだったら、谷間にちんこ挟み込んで滅茶苦茶に掻き回してやるのによっ!!」

男の喜びを想像して興奮に打ち震えるが、今の肉体には青筋を浮き立たせて急角度に反り返る剛直はない。それでも下腹の奥が煮えたぎるように熱くなり、ジンジンとした疼きを宿して切望を訴えてきていた。股ぐらの内側から何かが溢れ出ているような感触と共に、ペニスがあつた辺りに張り詰めるような充血の疼痛を感じる。

今までに味わったことのない異質な、しかし慣れてくれば結構悪くない感覚にアーヴェンガルドは馬乗りからミューネの上のし掛かるように体勢を変えると、熟れきつた爆乳房へ顔を埋めてのし掛かった。

「ふあ……。あ、温かい……」

しっとり汗濡れた、しかし甘いミルクのような芳香が鼻腔を満たし、懐かしいような気持ちに心が満たされた。熱く体温を増した房肌が頬に密着し、陶酔をより深くさせる。

「ん、あ、ああ……は……んっ。ふあ……め……」

女剣士の身悶えも大きくなって、喘ぐ声も言葉らしきものが混じってきた。

収まりきらぬ爆房をそれでも隠し通そうと、胸当てが頑固に貼り付く。

その汗滲んだ革製のカップを、アーヴェンガルドは性急な手つきで引き下ろした。

「はわうっ！ はうう……ンソッ!!」

ぶるん、と大きく波打って乳白色の熟し切った肉果実が弾け出た。その突端で房の大きさにしては粒の小さな乳首が紅色に充血して、コチコチに強張っている。

「乳首……こんなに、勃ってるぜ。気持ち、いいんだな？」

「はう、だ、だつてえ」

からかうと寝ぼけたまま嬉しそうに身を振る。その仕草に不思議な胸の高鳴りを覚えながら、魔王は、かぶつ、とその粒勃ちを唇に含んだ。

ピクンと小さく身を震わせミューネが息を呑む。敏感な胸粒を啄む唇の刺激を余すところなく味わおうと集中しているのが分かる。

その無防備に与えられた乳房へと、魔王は甘えるように顔を埋めた。

(ん……母……上……)

物心つく遙か前、記憶など残っていないのに、今は亡き母の胸に抱かれて母乳を食んだときの安堵に似ていると思ってしまった。沸き起こる衝動に従って、唇の間で硬く充血した存在感を訴える乳首粒を、ちゅーッと勢いよく吸い上げた。

「はうっ!! ん……ッはっ、ああっ! ふえっ、ク、クラリス、ちゃん?」

流石に強い刺激を受けて、激しい身震いに見舞われながらミューネが目を覚ました。

寝ぼけ眼を見開いて、乳房に夢中な様子の女勇者に驚きの声を上げる。

「へっ、起きやがったか。無駄に乳ばかり成長しやがった女剣士めがっ」

とろりと乳房にヨダレを垂れこぼしながら口汚く嘲ると、下品に突き出した舌で乳首を乱雑に舐め転がした。

「ひやうっ！ は、ああんっ!! そ、そんな……なあ。ん、ああっ！」

ぷるぷると波打つ乳房の上で硬直した粒が翻弄され、おっとりした顔を顰めて悶える。

「こんなバカでかいくせにずいぶんと感じやすいんだな。每晚自分で弄って開発したのか、それともあのすかした騎士野郎に揉んでもらってんのか？ 勇者と共に戦う女剣士ともある者がとんだ淫乱乳の持ち主だぜ」

「ひやうっ、ちが……う、そんなことしてな……あつ、ああつ、ふえああつ!!」

口答えを許さない。ミューネが何か言おうとすると、すぐに乳首を圧迫しつつ熟れ肉を根本から捏ね返すような勢いで巨乳房を揉み弄って喘ぎを上げさせた。

（へへ、人間の女も中々面白れえな。魔族の女みたいにイケイケでよがりまくるのもいいけど、こうやっていちいち恥じらいながら快感が抑えられねえのを苛めるのは、なんていうか……そそるぜっ）

惜しむらくは征服欲の衝動を促進させる男根にいきり立ちを感じられない事が物足りないが、下腹から生じた熱で股間が熱く潤んでくる昂りも慣れてくれば悪くない。

剣士に覆い被さった体勢で砲弾型に垂れ拉げた自分の胸の膨らみも、ジンジンと先端が

充血の疼痛に見舞われている。試しに触ってみたいが、酒場で胸を挿んでしまったときのよな情けない反応を示しかねない。この身体の感触は後で改めて味わうこととして、今は巨乳の快感に喘ぐ女剣士を貶めることに専念する。

「くくく、ここもすつかりぐちよぐちよぐちよじゃねえか。ちよつと乳揉まれただけで欲しくなつちまうなんて、どれだけ淫乱なんだよ」

一度刺激を与えたら今度は乳輪の周りを舐めるだけで、乳首には一切触れず焦らしまくる。唇を噛んで切なさを堪えながら、訴えかけるような眼差しを注いでくるミューネの脇へ、添い寝するかのような横臥気味の体勢へと身体をずらす。

触れやすくさらけ出された両脚の間に手を潜り込ませ、股間をまさぐった。

「ひうつ!! ふああつ、そ、そんな……とこ、あうつ!」

胸に劣らず豊満な尻房を辛うじて包み込む薄手の下穿きが、早くもたつぷりの膣蜜で濡れていた。遠慮することなくその下着を捲り下ろし綻び開いた花卉の内側へと指を滑り込ませると、ぬちゃ、と淫靡な液音が響く。

「ほら、広がってる。指がどんどん埋まっていつちまうぜ……っ」

「いや……あ、は……ああああ、そこ、ふああああ、だ……め、えああああ……」

陰唇襲が指先に絡む牝裂は、触れるほどにヌメリが強い液汁が溢れ出して熱く柔らかく蕩けてゆく。恐らくは、今の自分の股ぐらもこれと大差ない状態になっているのかもしれない。指で掻き穿ると、この女剣士みたいに腰をくねらせながら、男では味わえぬ快感に

甘いよがり声を張り上げてしまふのだろうか。

そんなことをふと思い浮かべると、妙な興奮が胸をざわめかせた。

いつの間にかキュッと引き締まった女の尻を無意識にくねらせながら、アーヴェンガルドはミューネの女陰をまさぐって熱蜜を滾々と湧きこぼす狭穴の入り口を探り当てた。

「ひあんっ!!」

「触った途端に、食らい付いてこようとしゃがったぞ、お前の穴。ぶつといるのが欲しくてたまんねえようだな〜?」

可愛い悲鳴を上げてヒュンと膣口を収縮させる様を逃さず嘲ると、女剣士の喘ぎ顔が恥じらいで真っ赤になる。

勇者の姿をした魔王の問いかけに首を振りたくつて否定するミューネだが、膣口はヒクヒクと微震しながら一段とたつぷりの愛液を溢れさせた。

「でも残念だな。お前のここに挿入いれてやるのは、このほっそりとした指だけだ!」

今の魔王にペニスは無いのだから他に挿入できるものはないのだが、お預けを装って意地悪く言う。蜜汁に濡れふやけたミューネの膣穴へと意表を突くような無造作さで、魔王は細長くしなやかな女の中指を押し込んできた。

ぬぷぬぷぬぷ、にゆるるる、にゆぷふんっ!!

「ひふうううっ!! ふあっ、へあああああ〜〜〜っ!」

ペニスよりかなりサイズの小さな指をめり込まただけで、女剣士は不安げな悲鳴を

張り上げて悩ましく全身を痙攣させた。

その反応は、初めて膣内に異物を迎え入れた処女に間違いない。

それでも巨乳房の愛撫から始まって十分に高められた官能に、狭い濡れ壁が激しく窄まって、根本まで埋まった指を圧迫してくる。

「はっはーっ、ちんぽじゃなくて残念だったな。そんなに締め付けたってこいつは指だ。これ以上太くなんかならないぜ。それでも欲しいか？ もっと奥までっ!!」

くちゆくちゆくと収縮壁をほぐすように優しく掻き回しながら、奥底に脈打って蠢く丸みを帯びた子宮器官を指先で軽やかに遊ぶ。

「ふあううっ、あ、はああああ……」

受精すれば子を宿すことになる、女にしかない部分への刺激に驚いてミューネが腰を軽く跳ね上げた。その様も淫乱な牝と愚弄しようとする、女剣士は吐息を荒く乱しながら膣に指を入れられたまま上体を起こしてくる。

「ん……ふう、クラリス……ちゃん……」

「な、なんだ……？ てめえ、どういうつもり……、ひうっ!!」

切なげに嚙めていた女剣士の顔が、暗れ暗れと喜悦に満ちた表情に変わっていた。その顔付きで唇を寄せられ、思わずアーヴェンガルドも、のし掛かっていた上体を起こす。その女勇者となった美貌を逃さぬとばかりにミューネが首筋を両手で抱き締め引き寄せる。

「まさか……、クラリスちゃんの方から、わたくしに、こ、こんなこととしてきて、くれる、



なんて……。はあ……。嬉しい……」

「はあっ？ んう……。っ!!」

信頼する仲間から突然卑猥なことをされたというのに、嫌がるどころかむしろ嬉しそうに蕩けた笑みを浮かべ、唇を重ねてきた。

(こ、こいつ……。っ、まさかっ!!)

吐息に熱く蒸された柔らかな唇の感触に心奪われそうになりながら、訝しげに顔を顰める。ウツトリと瞼を閉じて、甘い砂糖菓子のような唾液にまみれた舌を積極的に差し込んでくる少女。絡みつく舌と舌の浮遊感を催す心地よさに思わず流されそうになりながらも、感じやすい女の身体に憑依した魔王は慌てて唇を引き離す。

「あん♪」

名残惜しそうな声を上げつつ、女剣士は愛おしげに微笑み掛けてくる。

「おまえ……」

その笑顔を当惑の眼差しで睨み付ける。言葉に詰まるアーヴェンガルドへと、桃色髪を渦巻かせた女剣士の方から嬉しさが抑えきれない様子で声を弾ませてきた。

「やっぱり、わたくしたちの間に言葉なんかいらなかったのねっ！ 何も言わなくても想いが通じていただなんて!! ああっ、でも言わせてクラリスっ!」

(な、なんだっ!!)

ちよつとやそつとじゃ引き離せない力でガッシリと抱きつきながら迫るミューネの尋常

ではない迫力に、魔王が気圧される。

「好きっ！ 好きッ好き好き好き好きスキッスキスキスキ好きィ——ッ、だ——いきつきッ!! 小さな頃から、好きだったんだから〜〜、ク☆ラ☆リ☆スッ♪ でも、あなたつたら、ああ……、勇者としての使命に、一生懸命で、愛とか恋とかなんて、心ないみたいだったから。まして、女同士でなんて……。でもっ、でもでもでも、でもっ！ そのぷにっとならなくてぴちぴちっとな張りが胸の内では、わたくしをめちゃめちゃに乱れさせて、頭がどうにかなくなっちゃうほど絶頂^イせまくって、おツユまみれなぐつちよぐちよにしちやいたって、素敵な想いが弾んでいたのねっ!! ああっ、嬉しいっ、クラリス!!」

キラキラと瞳を輝かせ、興奮した子犬の様にハアハアと荒く息を弾ませる女剣士に魔王呆然。勇者の仲間を始末する前に、その勇者自身の身体で辱めてやろうとしただけなのに、何だかとんでもないことになってしまった。

「——ま、待てっ、俺はッ!! えっ? なっ」

彼女の瞳に押し入れた指を引き抜いて逃れようとするが、キュッと締め付けが強くなつて放そうとしない。驚き強張る隙に、ミューネの手がお返しとばかりにアーヴェンガルドの股ぐらへ潜り込んできた。

「ばか、やめ……ふぁッ? ああ、どこ触ってッ!!」

脚を窄め守ろうとするが遅い。指先が陰部に触れた。その瞬間、雷撃魔法を喰らったような熱い痺れが走り抜けた。身体中から力が抜け落ち、へなへなとへたり込む。

「あんた、なに企んで……!？」

黒い笑みを浮かべたままの魔王にエピカが食って掛かろうとする。しかしそれを押し退けるように、圧倒的な胸の膨らみを暴れ弾ませながら桃色髪の剣士が駆け寄ってきた。

「あうゝ、ずるいゝ、わたくしだってクラリスちゃんをおんぶしたいのにいっ!!」

ふくよかな頬をさらにぷっくりと膨らませて、美味しい役割を得た騎士に抗議する。

「し、しかし、無双の剣士殿とはいえ女の子に力仕事をさせるわけにはいきませんから。この場は私にお任せ下さい、ミューネ殿」

勢いに押されながらもローランドは千載一遇の役得を譲ろうとはしない。

「女だから甘く見ないで下さいゝっ。力ならローランドさんよりもわたくしの方があ
るんですからっ!! なんなら、力比べしましょうかっ?」

いくら凄んでも愛くるしさが増すだけの容貌で、勝負を挑もうとする。そんなミューネに銀髪の騎士が面食らうさまに、女勇者姿の魔王が進み出る。

「クラリスちゃん♪」

女剣士の髪を指に絡ませて抱き寄せると嬉しさに頬を赤らめ、子犬のように甘えてきた。

「お前にはこんな事より、今度ベッドで気持ちのいいお願いたっぷりしてやるから、な」
耳元で低く囁き、唇に軽く口づけしてやる。

「ひゃうんっ♪」

途端に、歓喜の頂点に表情を弛緩させて、ミューネは腰が抜けたようにその場へへたり

込んでしまった。呆気に取られて言葉もないエピカに悪戯めいた笑みを向けると、同じく驚き立ち尽くすローランドへと振り返る。

「さて、もたもたしてたら町に着くのが夜中になっちゃう。出発するぞ」

まるで別人のようなクラリスの、しかしその魔性と化した美貌に見詰められ、実直な騎士は操り人形のようななぎこちない動きで屈み込む。

「ど、どうぞ……」

緊張に上擦る声に応じて、アーヴェンガルドはその背中へと身を預けた。首筋にしなやかな腕を絡めて、豊富な胸をことさら押しつけるように密着させるとローランドが驚きに身を打ち震わせる。

「そ、それではッ！」

その動揺を誤魔化すかのように、不自然なほど元氣な掛け声を張り上げて立ち上がり、魔王が操るクラリスの身体を背負って森の中を進み始めた。

優男に見えて流石に鍛えている騎士だけあって、かなりの重量になる大剣を装備したままの女勇者を背負っても足取りがよろける様子はない。先行するミューネとエピカに遅れること無くついて行く。

「く、苦しくはありませんか？ あまりゆっくり出来ませんので揺れるとは思いますが、この身ど……」

太腿の裏を支える彼の手が、緊張に汗ばんでいた。本当なら気色悪いはずだが、この身

体の感覚が影響しているのか不思議とそれほど不快感を感じない。

憑依した他人の肉体に感情が影響されることを興味深く思いながら、アーヴェンガルドはこの身体の持ち主への切ない思いを秘めているらしい青年に、残酷な悪戯心を沸き立たせていた。

「そんなこといって、俺、じゃねえ……わたしにもっとしつかりとしがみつかせようって魂胆なんですよ？ 背中におっぱい当たってるの、気持ちイイ？」

いくらこんな身体になったとはいえ、女みたいな言葉遣いなどまっぴら御免だ。しかし、この間抜けな騎士野郎をからかうためとなれば話は別。戦いの最中、二、三言葉を交わしただけな女勇者の口調を、こんな感じだったかとおぼろな記憶で真似てみる。

「——なっ!! そんな、わ、私はッ！ おっぱい、なんてっ。いえ、なんてっというのとは別にクラリス殿のおっぱい……い、い、その、む……胸ッ、そう、胸……を軽視するわけではなく!! つ、つまり、その様な破廉恥な意図で、尋ねたわけではないのでしてっ！」

効果は絶大だった。恐らく口調が似ているかどうかなど関係なく、ローランドは勇者からの思いがけない問いかけに目を白黒させて狼狽える。

「あら……、わたしのおっぱい、こんなに当たっているのに気持ち良くないの？ 大きさには自信あったんだけどな。んふ……、あ、は……あ」

大爆笑したいのを堪えて今度はクラリス本人ですら絶対遣わないであろう甘えた口調で拗ねてみせる。その際に身をくねらせて撓わな房を捏ね回し、背中への密着度を高めた。

「ク、クラリスどの、いったい……どうしたの、です……か……？」

騎士の足が完全に止まってしまった。不自然なほどの前傾姿勢となり、何かを誤魔化すかのようにもじもじと両脚を内股にしている。その様に騎士の首筋へと頬を擦りつけながら、魔王は女言葉を装ったまま鼻に掛かった声で囁く。

「勃っちゃったんでしょ……？ おちんちん。そんな前屈みになっちゃって」

「ひゃわっ!!」

瞬間、素っ頓狂に声を裏返して、ローランドがバネの弾けた玩具のように直立となった。いきなり放り出されたが、魔王は勇者の身体でひらりと身軽に着地する。

「うわ、も、申し訳ございませ、んわぁああっ！ クラリスどのおおっ!!」

慌てて振り向く騎士を見ると、股間部が簡易天幕のように隆起していた。今にも布地がはち切れそうなその箇所をまじまじと見詰めてやると、ただでさえ真っ赤に染まった顔を、発火しそうなほどにますます上気させて銀髪青年が悲痛な声を迸らせる。その叫びに、エピカとミューネが大急ぎで戻ってきた。

「どうしたのよ！ てつきり付いてきてると思ったら、なにもたまたして……うわっ!!」

「ま、まさかクラリスちゃんが何か大変な目に……ひゃううっ!!」

不調の勇者を心配する二人が、引き寄せられるように騎士の下半身へと視線を向ける。

二人とも驚愕に顔を引ききつらせて立ち尽くすその傍らで、魔王がほくそ笑む。

「ひどいっ、ローランドったら！ わたしをおぶってくれるふりしながら、もっとおっぱ

い押しつけろとか、エッチなこと言ってくるしつ。頼りがいがある優しい騎士だと思つたのにつ。本当はイヤらしいこと考えて身体触つてただなんてっ!!」

流石に余りに空々しすぎて、口調が棒読みっぽくなってしまふ。

「ええええええええっ!! ク、クラリス殿っ!? 私、その様なこと言つた覚えはっ!」

それでも効果は絶大だった。事実無根の大嘘に、実直な騎士は真つ赤だった顔を真つ青にして慌てふためく。必死に無実を訴えようとするのだが、股間で隆々と勃起し続ける男根がすべて嘘臭くしてしまう。

「——あんたねえ……ッ」

アーヴェンガルドの悪戯であることに気付いたエピカだが、魔王が勇者に憑依している事実を仲間にはばらすことは出来ない。約束を破つたら、勇者の身体が無事では済まない。

ただ視線だけを僅かに友の姿をした敵へと向けて、咎めるように小さく呟いた。

しかし動転した騎士はそれを自分に向けられたものと受け取り、ますます狼狽える。

「うゝ、わたくしのクラリスちゃんに……ッ。酷いです、ローランドさんっ!!」

女性三人に男一人のパーティ。

庇つてくれる同性はおらず、情けない表情となつた冤罪の騎士に、

「——くうッ!」

笑いが堪えきれず、アーヴェンガルドは顔を押しさえて一目散にその場を逃げ出した。

その様が他者からは、溢れる涙を堪えきれず、しかし誇り高い勇者故にその様を仲間た

ちに見られたくなくて走り去っていったかのように見える。

「クラリスちゃんっ!!」

「一人にしておいてあげなさいっ、ミューネ」

追いかけてきたら泣きつくふりをして胸を存分に弄んでやろうと思ったのに、エピカは女剣士を引き留めた。

「……………。いくわよ」

慰めてやろうとでもしたのだろう、しばらく騎士をジッと見詰めていたが結局言葉が思いつかなかつたらしく、女魔導師はただ小さく溜息を漏らした。

その傍らでほっぺたをぷっくりと膨らませて憤慨の眼差しを彼へと向け続けるミューネの手を引き、エピカはその場から立ち去っていった。

魔王に関する事情を知らぬ騎士にとつては、彼女が呆れ果てて去って行ったようにしか見えない。みるみる内に落胆の色が、生真面目そうな顔染めて行く。

「な、なんでこんなことに? わ、私は本当にクラリス殿には何も……。いや確かに、胸の膨らみが……背中に。で、ですが、あれはクラリス殿自身が……。ッ」

騎士の情けない泣き言を背中に聞きながら、皆の姿が見えない距離まで離れると大きな木陰に身を隠す。

「あーっはっはっはっはっはあっ! あのお人好し騎士の、馬鹿っ面!! 傑作だぜ全く。こんな手に引つかかるなんて、やはり聖職者は間抜けなお人好しが多いな」

ようやく思う存分に爆笑すると、息を切らし大木にもたれて腰を下ろす。

「まあ大した事じゃないが、これで騎士の野郎、女どもからの信頼ガタ落ちだぜ」

狡猾な笑みを浮かべて満足げにうなづく。目的を遂げたら邪魔な勇者パーティは叩きつぶすつもりだ。服従を誓うつもりなら女どもは生かしておいてもいいが、神の信徒を名乗る男などいらぬ。そのためにもヤツらの結束を崩しておくことは必要だ。

それにしても……。

「この身体……。あんな男にちよつと色目使つてやつただけで、こんな……」

勇者に懸想している騎士を動転させるため女の演技をして色香を振りまいただけだというのに、妙な疼きが治まらなくなつてしまつてゐる。

(身体が……。あの野郎に欲情しちまつてるつて、ことか……?)

当然ながらアーヴェンガルド自身は男を性的対象に見る趣味などないし、ましてや魔族の天敵である聖職者など目にするだけでも虫酸が走る。なのに演技とはいえそれほどの抵抗感もなく女々しい言葉を遣い、男の身体に乳房や陰部を擦りつけて喘いだりした。

「そう……。あれは、クソ騎士を陥れるための、策略、なんだ……。なのに、こ、この女の身体が、勇者のくせに……。どうしようもない、淫乱、だから……。んふあ……」

この肉体に精神が入り込んで以来、毎夜のようにこの身体を自分自身で確かめてみて、感度の高さに驚かされた。

清楚な顔立ちをしているくせに、少し刺激したくらいで悶々とした欲求が沸き起こる。



(俺は、魔族を統べる……大魔王、アーヴェンガード、なのにつ！)

男であるはずの意識が、この牝の肉体に影響されてきているのだろうか？
ともかく、連中の所へ戻る前にこの情欲を静めなくてはならない。

「くっ、ふう……。く、そ……。ッ。ンッ!!」

自分の意思で勇者の身体を弄り回し貶めるのならまだしも、魔王ともあろう者が人間の肉体ごときに否応なく衝き動かされることに屈辱を覚えた。それでも堪えることが出来ず、下着の脇から指を滑り込ませて、疼きの源泉を直に触る。

「お、あ、ああ……。ん……。くう……。っ！」

くっぱりと開ききった粘膜溝に指先が滑り込む。ぬめぬめの愛液にまみれた陰唇襞が煮込まれすぎた薄肉のようにとろとろな感触で絡みついていた。触れている箇所を中心に下半身全体が熱い痺れに包まれる。その心地よさの中でヌルヌルした肉スリットの奥へ向かって指先を滑らせると、悦汁を湧きこぼす小穴が待ち構えていた。

「んふあああつ、この……。穴あつ」

さほど力も込めないのに、第一関節までがにゆるんと簡単に埋まり込んだ。

息が止まるような至福感が膨れあがつて、たまらず身震いが走る。

「お、おうつ、ほあ、は、ああ……。い、淫乱な、穴あ、指、入れただけ、で、こ……。こんな、気持ち良く……。なりや、がって……。ひあつ!! あふつ、ううッ!」

波のような甘美が次々に押し寄せ、時折激しいピークをもたらし、脳裏を真っ白に染め

る。その度に奥の方で疼き続ける壺肉が粘りを増した淫液を溢れさせて、股ぐらをぐちよぐちよにさせた。

(もう……少し……で、イ、イケる……はず……)

膣穴が収縮しっぱなしになり、射精とは違った込み上げ感に思考がまとまりを失い行く。その甘美を後押しするように、魔王は荒く息を弾ませながら膣内の攪拌を濃密にして、空いた方の手で張り詰めたような狂おしい疼きに満たされつつあった美乳房を握り締めた。

「ひあああつ！ はあああううう——ンッ!!」

柔らかくそれでいて弾力的に押し返してくる撓わな膨らみに指がめり込んだ途端、灼熱の快感が決壊して膣からの昂りを煽った。汗まみれた肢体を弓形に反らせてだらしなく呆けた美貌をさらに淫らに崩す。それでも絶頂に届かずもう一押しとばかりに、充血してそり立った乳首と、包皮から頭を覗かせる陰核とを同時に指先で圧迫した。

「おおおおお~~~~~~~~ツツ!! あつ、ああつ、アアアアアツ!」

脳天に落雷を食らったような衝撃が弾けた。歓喜一色にすべての細胞が染め尽くされ、瞬く意識が物凄い速度で快楽の頂点へと突き上げられて行く。その最中、

「クっ、クラリスちゃんっ! ああ、あああ、あつ、クラリスちゃんツツ!!」

近くの草むらの中から桃色の髪を渦巻かせた愛くるしい女剣士が、震え昂る声を張り上げて勢いよく飛びついてきた。

「へあ? おわあああああツ!」

絶頂に呆け行く意識で全身を痙攣させながら振り返ると、尋常ではない大きさの撓わな膨らみ二つが勢いよく拉げ弾みながら目の前に突っ込んできた。避ける暇もない。

「むぐうっ!!」

顔面を圧倒的な質量の柔らかくむちむちな房球に覆い尽くされながら、押し倒される。

「お、お前……っ。ミューネッ!」

もっちりとした弾力で息苦しく鼻腔を塞ぐ爆乳を押し退けると、忌まわしい敵であるはずなのに妙に憎みきれない雰囲気を感じた美貌が息を乱して迫ってきた。

「ク、クラリスちゃん、中々戻って来ないから、心配で捜しにきたらっ。こんな、こんなことを、一人でッ! ローランドさんに変なことされて、え、えっちな気分になっちゃったの? わ、わたくしに、言ってくれば、いつだってお相手するんだからっ!!」

ぷるぷると巨房を弾ませながら興奮を昂らせ、情欲の眼差しを幼なじみの姿をした魔王に向けてくる。どうやら自慰に耽ってるクラリスを見つけ、その様子を草むらに隠れずつと見ている内に、欲情がどうしようもなくなってしまうようだ。

「ば、ばかっ! そんなわけ、あるかっ!! いいから、俺の上から降り……ひあっ!」

事実、騎士を陥れるために色仕掛けを仕掛けたのが自分自身発情してしまっただが、そんなことを認めたくなんかない。威圧的に命じて女剣士をどかそうとしたが、

「うふ、恥ずかしがらなくていいのよ、もうわたくしたちは恋人同士、きやつ♪ なんだからあ。自分でするよりも、わたくしがもっと気持ち良くして、あ・げ・る……」

ミューネは尻を高々と突き上げて俯せに蹲り、顔を勇者に憑依した魔王の股間へと埋めてきた。

「ああ、すごい……、もう、こんなにぐつちよりだあ……」

立ち上る甘い淫臭にウツトリと笑みを浮かべ、なおさらに鼻面を近づけてくる。

「お、おいつ、やめ……ろっ、そんなとこっ!」

両脚を大きく開帳されて立ち上がれない。

「最初はビックリしちゃったけど、乱暴な口調のクラリスちゃんも、ステキだな」

女陰の内側からの愛液が止まらない。濡れた下着に綻び開いた牝蕾の中がくつきり透ける。その部分へとミューネの舌が軽やかに躍った。

「ふえああああつ、舐める……なんてっ!! あつ、ああああつ、こん、な、んあんっ!」

ヌメヌメとくねる舌にふやけきつて感度を増した粘膜が、自在に蠢く舌肉に掻き乱される。布地の上からだというのに、悦美の熱が渦巻いてたまらない。

「あふああ、おいひい、くらりしゅひゃんの、ここお。んふあ……」

しかも畳み掛けるようにミューネは、ねっとり陰部に貼り付いた股当てを横に押し退けながら、指を、しかも二本纏めて、女体の発情に翻弄されるアーヴェンガルドの膣穴へとめり込ませてきた。

ぬぶっ、ずぶぶっ、にゅずずずずぶん!!

「ひうはあつ! ふわあ、指いッ!! んあ、でも、ふ、太……いい、くあああつ、入ッ、

入って……くりゆっ!! へあ、や、やめッ、んお太ッ、あ、あ、あああつ、はぁンッ!!」
思いがけない太さに、処女の本能が恐怖を沸き立たせる。しかし女騎士の人差し指と中指は処女膜を傷つけること無く襜壁を押し広げて、切望滾る穴を満たしてしまった。

「お、ああ、ミューネの、太い……の、俺の、膣内ッ、入っち、まって……るうっ!」

「ふぁー、くらりしゅちゃんの……、もーこんなに、し、締め付けてきひやりゆ。んはあ、
気持ちいいんら、わらくしの指い〜」

痙攣が治まらない。膣壁が収縮しっぱなしで女剣士の指に絡みついて、硬い質感と二本分の太さを克明に感じる。

悦美に女体を震わせ、ねっとり汗濡れた顔を困惑と昂りに強張らせる目の前、ミューネは地面に拉げる自分の爆房で上体をゆさゆさ弾ませ、突き上げた熟れ尻を楽しげに躍らせながら、的確に探り当てた勇者の牝穴の快樂窪みを刺激してきた。

「あひっ、お、おおお、あ、ッ! しよこ、んあ、だ、だめっ!! ふあああつ!」

しかも下着の上からでも悩乱的だった舌技が今度は直に溝粘膜を穿り、灼熱の切迫で追いついてくる。

むちゅ、くちゅ、れろれろ、ちゅぱっ、ずぶっ、ぬぼぬぼぬぼっ!!

「ふおおっ、ああっ、はうんあああつ! ああっ、くるっ!! 奥っ、きちやうっ!」

ペニスでは味わえない肉体の内側と外側から同時に攻め狂わされる快樂に、女体に封じられた少年魔王の意識が為す術も無く翻弄されていた。

胸当てから溢れそうな美乳を上・下左右に弾ませて、官能の震えに身を委ねる。

「あはあ、もつと、気持ち良く、なりゆからあ。ほら、ここっ、ここいいれしょっ!!」

幼なじみの痴態に昂った女剣士が、処女膜を傷つけぬよう隙間を通して膣の奥まで指を滑り込ませた。打ち震えながら迫り出してきていた子宮の口を、軽やかに押し弾く。

「んひぎっ!!」

同時に、淫列を穿っていた舌尖を割れ目の上へ滑らせると、脈打ち疼いていた陰核を容赦なく乱暴に転がした。

「はがっ!! あ、お、ほう……あ、はああああ、あ……く、くる……ンアッ!」

一瞬で意識が灼熱に染められた。片方だけでも理性を崩壊させる強烈な快感が、下腹の奥と女陰の上端で暴れ狂い、女の肉体にまだ慣れきらない少年魔王の精神を翻弄する。

得られそうで中々得られなかった達する感覚が急激に膨張しながら迫り上がり、そして……、爆ぜた。

「イツ、イイイイイツツ、イクウ——ツ!! おんな、の、からだッ! こんなっ、ふあああああつ、飛ぶッ、頭飛ぶううっ!! も、もうっ! くふあああ——っ!!」

ぶじゅううっ! びゅじゅびゅじゅびゅーっ!! ベじよじよじよばあ——っ!

子宮と陰核の刺激に急加速され一気に突き上げられた絶頂に、跳ね上げた股ぐらから夥しい潮飛沫をぶちまけて悶え狂う。

「うぐうっ！」

さらに奥を指し進み来る怒張を押し戻そうと、反射的に力む。

「へっ、まだ先っぽ入れただけなのにもう締め付けて来てるぜ！ ずいぶん淫乱な勇者様だな!!」

しかし膣壁は男根を追い出すどころか、熱烈な歓迎をするかのように幹肌との密着を高め、忌々しい異物感を強めた。

ぬずっ、ずぶぶっ、ずぶりっ。

(くうっ、こんな……音お……っ)

量を増した愛液が恥ずかしい音色を響かせる。

本来なら勇者自身が味わうはずの恥辱に頬を赤らめ憤っていると、

「んおおっ！」

ズンと、重々しい鈍痛が膣のまだ浅い部分で全身を揺るがした。

(こ、これ……ッ)

陰莖が障壁のようなものに突き当たっている。それが何かはすぐに理解できた。

「流石は潔癖な勇者様だ。処女とはなっ!! あのなまっちろい騎士はずいぶんお前にご執心のようなだが、ヤラせてやってなかったのか？ ずいぶんと可哀想な事をするな」

そんな事は知ったことじゃない。こっぴどく痛めつけられたのか、身体を起こすことも出来ず今にもくたばりそうな顔色で心配そうに見詰めてくる銀髪騎士も、今クラリスの身

体の主となつてゐる魔王に取つては、どうでもいい存在だ。しかし、

「まあ、これも運命つてヤツだ。お前の初めて、俺が存分に味わわせて貰うぜ」

これだけのご勘弁だった。犯りたいなら、勇者本人の意識が表に出ている時にしてくればよかつたのだ。こいつらが色々と手間暇掛けて失神するまで勇者をいたぶるから、最悪のタイミングで意識が切り替わつた。

「ま、待てっ」

膣口を押し広げさらに大きさを増して、処女膜への重く痛い圧迫を強める勃起肉に焦りを覚え、思わず懇願するような眼差しを巨漢に注ぐ。

自分の身体ではない。どうなるうと知つたことではない勇者の肉体だ。

なのを得体の知れない恐怖が湧き上がり、魔王にあるまじき情けない反応を示した。

「あう、く、クソ……お……。う、あ、ああ……。嫌……だ……」

「どれだけ強がついても穴に入れられた途端そのざまかよつ！ 魔王を倒した勇者だかなんだか知らねえが、所詮そこらの小便臭え小娘と大差ねえなっ!!」

屈辱と羞恥と恐れが入り混じつて引きつる表情に嘲りの笑みを浮かべながら、グートが勢いよく腰を突き出す。クラリスの身体を抱え上げる兵士たちも呼応して、陰茎を迎え撃つように開帳させた股ぐらを前へと押し出した。

ぬぶ——ッぶっちいいんっ！

「——!! ひあああぐううっ！ くあああ、痛ッはあああッ!!」

怒張が突き当たっていた薄膜が、呆気なく突き破られる。その瞬間、息が詰まるほど重々しい激痛の衝撃波が腔穴から全身へと押し寄せた。

もつと激しい痛みを感じた事もあった。勇者にとどめを刺された時の激痛と悔しさは、今でも忘れられない。しかし男でありながら女の肉体で味わう破瓜の、下腹に重く響く痛みに仰け反り、強張った顔から涙を溢れさせ打ち震える。

ぬぶ、ずぶずぶずぶつ、ぬじゅつ、ぬぶずぶつ、ずつぶんつ！

その最中にも痛みに窄まる濡れ穴をこじ開け、絶え間なく溢れ続ける愛液の潤滑に任せ、幾筋もの血管を浮き立たせて怒張した極太が奥へと埋まり来る。

脈打って窄まる壁襞を刮げられ、甘い刺激が蕩けるように広がった。

他人の男性器を股ぐらから体内に挿入されるといふ、耐え難い行為をされているのに、この身体は呑気に心地よさを感じてしまう。苛つくのだが女々しい喘ぎが止められない。

「おおつ、あうつ、ふあああつ、ん……あああ、く、くる……なあつ、んあ、くつ、ふえあああああ……っ!!」

アーヴェンガルドの憤りにもお構いなしで傍若無人に腔穴を犯し行く怒張が、根本までみつちりと収まり奥底の狂おしく疼く壺器官を乱暴に弾き上げる。

内臓にまで響く衝撃と共に、歓喜するような高揚がその子宮壺から湧き上がって、女の肉体を火照らせた。

（ああつ、ああああ、ああ、い、入れやがったつ。こいつツ。男、なのにつ。男の俺の意



識になつてゐるつていうのにつ。な、膣内につ、薄汚いちんこ、挿入やがったツツ)

男である心は屈辱しか感じない。自分は男で、魔族を統べる王で、女を犯し辱め、屈服させる立場が相応しい存在だ。

(これ……が、挿入られる……感覚う……。じよ、冗談じゃない、の、にい……)

なのに今、女の、しかも忌々しい勇者の肉体と成り果てて、愚劣で醜い人間の牡などに薄汚いペニスで膣を犯され、媚びたようなだらしない喘ぎを漏らし身震いしている。

「ふん、初めて啞え込む穴には中々具合がいいぜ。しつかりと良く締まって、俺のちんぽに絡みついて来やがる。犯されるのが気持ち良くてたまらねえみてえだな」

破瓜の鈍痛がまだ残るといふのに、極太い肉勃起がズッシリと穴中を満たしている感触に壁が反応してしまう。

「ふ、ふざけんなつ!! てめえの、粗末なちんぽなんか、入ってるんだかどうだか分からねえよ! どう頑張ったつててめえごときに女を満足させるなんて、出来やしないんだから、この薄汚い祖チン、さっさと抜けっ!!」

挿入られている感覚を束の間、堪能していた。その悔しさと恥ずかしさを誤魔化すように声を荒らげる。しかしその罵倒は、全くの逆効果だった。

「ほう、俺のモノが粗末だつていうなら、手加減無しでも大丈夫つてことだな? いつも激しくやり過ぎちまつて、大概の女が一発で使い物にならなくなつちまうんだが、どうやらその心配をしなくていいみたいだ」

「な、んだと……？」

雑言を意に介さず嬉しそうに告げるグートの声に、クラリスの身体を抱きかかえる部下たちが薄ら笑いを浮かべながら、まるで敵軍の突撃に構える重装兵のように腰を落として踏ん張った。

嫌な予感が背筋を走る。その刹那、

「ひぎうっ！ はがっ！！ お、おとおお、ああううううううっ！」

ズツムウウウンッ！ ズツボッ！！ ズツッブ、ズブツッ！ ズブウウンッ！！
破砕槌の様に繰り出される重力級の抽送が、魔王が憑依する女勇者の股穴を襲った。

（くあああつ、こ、こんなっ！）

膣の壁襞が挟り返される。十分すぎるほどの愛液が潤滑していても、擦れ合う刺激が半端じゃない。否応もなく両脚がカクンカクンと無様に痙攣し、少しでも摩擦を和らげようとするかのように大股開きになった。

（ち、畜生っ。身体が、勝手にッ！！ こいつっ、ちよ、調子に乗りやがっ……ひあッ！）

極太な肉の塊が奥深くまで強引に押し入り、子宮を盛大に弾き上げる。

その刹那、望みもしない激しい快感が、拉げた牝壺から全身へと弾けた。

「ふえあああああ〜ッ！！ ひあああつ！ んくう、ああ、はあああ——ッ！！」

身体が浮き上がるような感覚に、艶めかしい嬌声が迸る。

（い、今の……声ッ！！ お、俺がっ!? くう——ッ！）

甘く蕩けた、快感によがり狂う女の喘ぎ声。そんな情けない声が自分の口からこぼれ出たことに驚く。いくら女勇者の肉体に憑依しているとはいえ、意識は正真正銘の男だ。女の姿だろうと何だろうと男に犯されるなんて気色悪い以外の何ものでもない。

「ああっ、く、くそうっ、なん……で、こんなっ。くふっ。ん……ふあああああッ」

狭穴をぐちよぐちよと突き穿られて、息つく間もなく奥器官を乱打されると、もうどうにもならない。身体が喜び打ち震え自分からも悦楽を求めて腰をくねらせる。

(この……女あ。しょ、処女……なのにつ！)

肉体の方でももう少し抵抗を感じてもいいはずだ。意識が切り替わる前に、この下衆な人間共によつて余程念入りにほぐされたのだろう。もしかしてこれまでに、勇者を貶めようと魔王が仕掛けてきたことも、この肉体の女の感度を高める一役を買ってしまっていたのかもしれない。

「だ、だめ……だ、これ……以上ッ、こ、このまま……じゃっ!! ふあああ、強ッ。くふうっ、お、奥うッ。コンコン、突くなあッ! ああっ、ふあっ、ん、はあっ!! ふひっ」
全力で激しく突き込んだかと思うと、急に勢いを弱めて軽やかに啄むようなストロークへと変えてくる。

「どうした、これじゃ物足りないか!? 不満そうにずいぶんと締め付けて来ているが?」
「——ふあああ……!! くう、う、うるせえっ!」

亀頭の先が膣口を弾く感触が、突き込みの勢いが弱まった分だけ鮮明に感じられる。

腔壁と幹肉の擦れ合いも、節くれ立ちの凹凸感が襲にしつかりと伝わりもどかしいような高揚を覚えた。じわりと滲む愛液の熱さが腔を満たしキュンと狭穴が締まるなか、溜息のような喘ぎを誤魔化すように意地を張る。

（まず……い、このまま、され続ける……と、こ、こいつつ。この、身体あ……）

怒張に圧迫され続ける牝壺の奥で、熱い疼きの塊が熱を増し大きさを増し、濃度を高め膨張してきている。かなり危険な予兆が、ヴァギナを突き上げられる度揺れ弾む美巨乳の奥で心臓を高鳴らせていた。これまで以上の刺激を与え続けられたら、一気に危険な領域へと達してしまう。不安が渦巻く中、

「そうかい、ならば、お望み通りここからは全力でいかせてもらうぜ。墮ちても、止まらねえぜ！」

勇者の胎内での昂りを察知したのか、グートが野獣の笑みを浮かべた。

「ひうっ！ やめっ！！」

魔王の背筋に寒気が走る。その途端、予告通りの手加減無しなストロークが陥落寸前のヴァギナへ襲い来た。

ぬつぶつ、ずつぶつ、ずぶずぶずぶ、ずぼずぼばんばんばんつ！ ずんつ、ずぶつ、ずぶずぶずぶずぶずぶぶぶぶつ！！ ずびゅつ、ずびゆるつ、じゅぶぶつ！

「くうううつ！ ふあああつ！！ んあああつ！！ ひあああつ、こ、これつ、強すぎッ、んいいいつ、ふああつ、はわうつ、んあああつ！！ やめつ、ひやめつふええええへつ。んほおお

おおあぁっ。こんな、くぁあぁっ、あぁ、もうっ！ んもおおおうううっ!!」

最初の激しい突き込みもまだ余力を残していたことを思い知らされた。

全力で愛液が分泌されるが間に合わず、極太との摩擦で膣壁が軋んで壁が千切れそうなほどに捲り返される。乱打が激しすぎて子宮が拉げつばなしで奥へ奥へと追いやられた。

「んんっ、んううっ、くふっ、おうっ、んあおっ、おおっ、あふううっ」

内臓が重い振動に晒され続けて息苦しさの余り溢れ出る、女々しい呻きがどうしても抑えられない。

少しでも衝撃を和らげようと細腰を弓なりに仰け反る度、胸で重々しい美巨房が跳ね暴れた。男なのに、魔王なのに、こんな不格好な膨らみが二つも胸にくつついている。

「い、いつもながら、分隊長の突き込み、す、すげえっ」

「見るよ、この女のツラ、もうアへりかけてやがる。もういついつてもおかしくないな」
「イッても全然終わらないからな。分隊長の突き込み。イッてイッて、散々イキまくって、それでも突きまくられて、ぶっ壊れちまうんだ、どの女もっ」

女勇者の身体を掲げ持つ兵士たちが、常識外れなストロークの勢いに吹っ飛ばされまいと腰を落として踏ん張る。彼らの指を肌へと食い込ませて支え持つ両手に加えて、興奮にいきり立った男根までもが背中や尻肉や脇腹に押し当てられていた。

その密着したカウパーまみれの亀頭が、振動でぬちゅぐちゅと擦りつけられる。

（くうっ、ちんぽ……ッ、汚……ふぁあ。俺の、顔お、そんな……な……な……くう、い、

イク……。このままじゃ、イッチまう、ああああ……)

歯を食いしばり巨漢を睨み付けているつもりだったのだが、快感に屈しただらしない表情になっていることを教えられた。

(こん……なっ、身体ああつ)

乳房が弾んで、切ない疼きに拍車を掛ける。

(ち、ちんぽ、中に……い、入れられただけで、こ、こんな、ん……はああんっ!!) もう何一つ抗うことが出来ない。快樂一色に全細胞が塗りたくられる。

(ぎ、ぎもち、イイイイッ!!)

認めまいとするが、快感が激しすぎる。

男根が膣穴を容赦なく出入りするだけで、女の肉体は悦びを抑えられない。

「ふえああつ、はううっ！ んああつ、もうっ!! ああつ、も、もおおおつ！」

この情けなく媚びたよがり声は、男である自分が女の身体で女の快感に夢中となって張り上げている嬌声だ。

「んふあああ、も、もう、ダメッ。もうっ、お、奥ッ、そんな、奥ううっ、ああつ、ふあつ、あつ、んくあああああつ!!」

子宮に熱が渦巻き、感情に歯止めが利かなくなった。

自ら乳房を掴み、疼痛の激しい乳首を乱暴に摘みながら美尻を揉み拉げて身悶える。

「ああ……ク、クラリス……ちゃん……。そん、な……。だ、だめえ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



ニャックプリム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



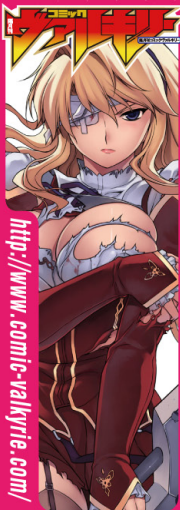
電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!